

追悼登山に参加して

富山 素美

今年の3月末、36年間の教員生活にピリオドを打ち、義母の介護に生活の重点を移した私は、「追悼登山」へのお誘いを頂いたとき、直ぐに参加を決めました。「いつかは独標へ追悼登山に行かなければ」という思いはずっと持っていましたが、なかなか近づきがたい思いもあり、このお誘いには本当に感謝しています。

40年前とはいえ、あの日に続く出来事は強烈に覚えています。特に1年生の時に同じクラスで親しく話した田村洋一さん、折井博親さん。変わり果てた姿で帰ってきた体育館での対面。その日の深志の上に鳴り響いたカミナリの怖さ。田村君のお家に伺ってお線香をあげたとき、かえって私たちにねぎらいのこたばをかけてくれたお母様……。

あの日は、演劇部の合宿で、登山は諦めて練習に参加していました。でも、その年のとんぼ祭をどうするのか、練習していた戯曲は「みんな我が子」。母親に息子の死を伝える場面がでてくる……。やっていいのか？ 遺族の方々はどう思われるのか……。みんなで何回も話し合ったことなど思い出します。

今回、山好きの夫と二人で参加しました。夫は「独標に祈る」の熱心な読者で、今回の追悼登山へ是非同行したいと付いてきてくれました。教員でしたので、児童を引率して登山する事もあり、その立場から何回も手にとって読んでいました。いつも本棚のすぐ手に取れる所に置いてあり、仲間に貸したりもしたので、本は背表紙がぼろぼろになってしまいました。（今は実家の父が修理してくれるというので松本の家にあります。）「学校登山の歴史に残る大惨事」と言われる事故を、短期間でここまで一冊の本にまとめて総括した先生方の血のにじむような努力に思いをはせながら、涙なしには読み進められない「独標に祈る」。今回追悼登山に参加するにあたって改めて、亡くなった11人のページを開き、お名前と写真、それまでの人生、遺族の方々の思いを読んで胸に刻み、登山に参加しました。

息子二人を連れ家族4人で、夏休みには尾瀬、那須岳、白馬、立山……と登っていましたが、この15年くらいはハイキング程度の山行きしかしていなかったのが少し不安はありました。でも、不思議と心配だった膝の痛みも出ず、急な岩場にしがみついて一步一步登った先の西穂独標は思い描いていた以上にす



こい所でした。ここでカミナリに遭ったのだ……！！西穂へとまるでカミソリの刃のように冷たく続く稜線と、岐阜県側と長野県側の崖下を独標の上からこわごわのぞきこみ、「安らかに眠ってくださいね」と呼びかけました。久しぶりの同期のみなさんとの再会。それぞれが40年の年を経てこうして同じ目的で一緒に行動した今回の追悼登山。私も長年の心のつかえがとれ、少し軽くなりました。鈴岡さんはじめ、実行委員会のみなさん、高橋校長先生、現役の山岳部のみなさん、本当にありがとうございました。

長森 恵

仕事の関係で昨年より長野市に在住。「母親の単身赴任」も10年程となる。

あの時以後、独標には数回登っているが、8月1日には行かねばという気持ちには強いものがあり、今年のご案内があり、単独で直行することをすぐ決めた。

その後、逢沢さんと連絡を取り、当日は本隊と合流することができた。当初より、悪天候は予想されたが、どしゃぶりになっても行く様子の逢沢さんの言葉が心地よかった。

40年前のあの日のことは、思い出すということではなく、いろんなことが鮮明に脳の中にある。私はバテ、西穂山荘で本隊を待っていた。すごい雨となり、山荘に皆避難をしている中、柳原先生が、すごい勢いで駆け込んで来られ救助を訴えた。皆が登っていった。柳原先生も来た道を即、折り返し登っていかれた。その駆け下り駆け上っていった急斜面を、先生の気持ちをかみ締めながら登る。

独標は、いつ行っても悲しい場所だ。今年、やっと8月1日に慰霊をすることができた。

当日、在校生の山岳部の子たちも登ってきてくれていた。本当に若いかわいらしい子たちだった。40年前の11人の若さを思った。

帰りはほとんどどしゃぶりだった。西穂も見納めというところで、雨が上がり西穂、独標がはつきり姿を現した。彼らがいると感じる。

これからも、今までと同じように「8月1日」は「8月1日だ」と思い生きていく。

